

Title	巨石文化と洞窟文化：佛西石器時代遺跡探訪記
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.175(517)- 197(539)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巨石文化と洞窟文化

—(佛西石器時代遺跡探訪記)—

毎日ベデカー一冊を相手に四十日あまりも縦横

無盡に見物してまはつたパリも少々あいたので、かねて計畫してゐたスペイン旅行を執行することにし、そのついでに西部フランスにおける石器時代の遺跡を訪ねようとして、いよいよ出發したのは昨年四月十二日。午後十二時十分ドルセイ驛からナントゆきの汽車にのつた。二月下旬陰鬱なロンドンを出發し、ベルギーを経てパリに來たのであつたが、これで再びひとり旅にでたわけである。梨か林檎であらう白い花の咲きみだれた果樹園や、眼を射るやうにかがやいた菜の花畑が、つ

ぎつぎに車窓にうつりゆく田舎の春景色は、いかにも新鮮爽快で、都會見物につかれた神経ものんびりとやはらぐのであつた。夕方六時五十分ナント驛につき、驛前のホテルに投宿した。

二

翌十三日からサンマー・タイムに變つて、時間が一時間早くなつた。朝食後ホテルを出て自動車でドブレ博物館にでかけた。主として考古學に關するものが陳列され、日本の鎧一領刀數振もあつた。ついで美術館にゆく。繪畫彫刻ともたいした傑作はないけれども、地方都市の美術館としては實に堂々たる建築であり、また作品の數も一千に

あまる多數である。残念なことには、日曜のこと

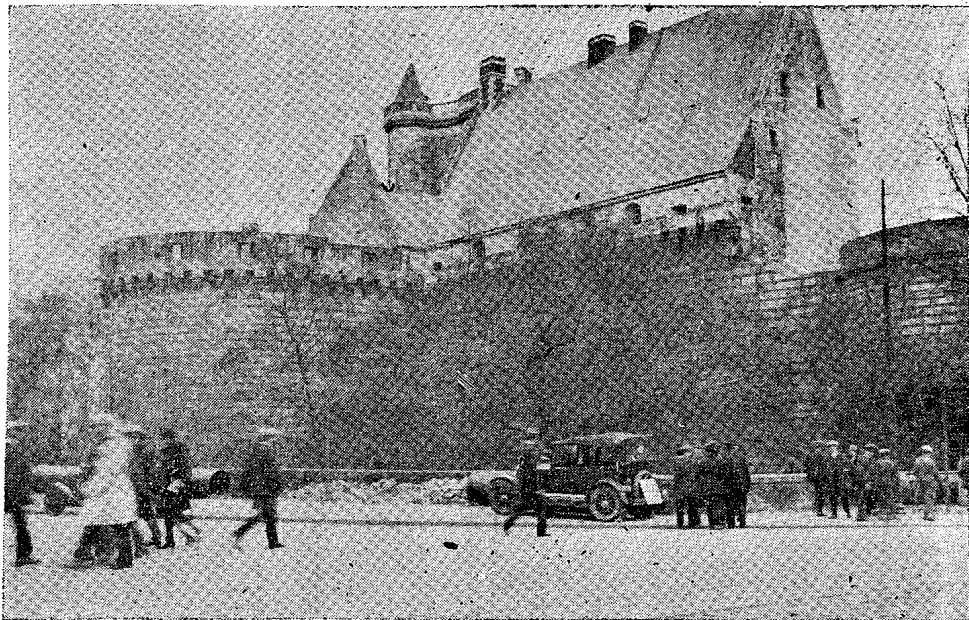
『では汽船にのるのかね』

とて午前ばかりの開館で、觀覽中に時間がきて追ひだされてしまつた。その上美術館をでると、思ひがけない驟雨にあつた。が幸ひその近くに第五世紀に起つたと言はれるサン・ピエールの大伽藍があるので、その中に入つた。午後は城廓の一部にある小さな博物館を見たが、そこに陳列されたわが國の浮世繪や其他の繪畫はいづれもたいしたものではなく、たゞ民家の内部を示してゐる數室が面白いと思つた。驛の食堂に入ると、よく肥へた女給仕がにこにこ愛想笑ひをしながらやつてきて

『何處にゆくのかね』

と英語で尋ねる。

『これからブルターニュへゆくのだ』



といふ。色が黒いからと言つて、この東洋の紳士をまさか汽船の水夫と見たわけでもあるまい。がこんなところでこんな親しい話を交はしてゐると、おのづから氣ものんびりなつた。この愛嬌あるおばさんに別をつけてナント驛を出発したのは定期を少しおくれで午後三時五十分。なるほど客車には、水夫や漁師らしい男が大勢のりこんでゐた。六時三十五分アウレイ驛につき、自動車で市中に入り、グラン・ドテル・デュ・パヴィヨンに投宿した。静かな田舎町と

しては、このホテルは仲々立派だ。それにちかみさんが英語が話せるので都合がいい。客が少く至

つて閑静である。言葉も十分わからぬくせに、こんな片田舎にはるばるやつてきたのは、カルナック附近の巨石文化の遺跡をみんながためである。

三

十四日。町なかのホテルから驛まで歩き、午前十時十分發の汽車で二十五分ばかり西南方に走つて、ブルアルネルについた。直ちに驛の西方三町ばかりの畑の中にあるヴュ・ムウランのメンヒルをみた。直立の石六基、最大のもの高さ一丈ばかり。こゝから更に一町ばかりへだて、メンヒル一群があり、二基立ち二基横つてゐるが、いづれも大きなものである。驛を出た頃は空もよく晴れ、雲雀の聲ものごかに、畑には菜の花がかじやいて、まことにおだやかな春日和であつたのに、このメンヒルを見る頃から俄に日がかげり、西風のつめたい風が海の方からはげしく吹きあげてきた。それでいそいでエルドヴェン附近のケルゼロのアリニエマンに向つた。が眞黒な雲がゆくての空からひ

しひしと迫り、ぼつりぼつり雨が降りだしたと思ふうちに、猛烈な疾風が眞向からたゞきつけてきた。マント以外には雨具をもたず、しかも風のつめたいことはまるで耳もちぎれさうで、正面をむいてはとでも進めず、うしろむきになつたまゝ歩いて行つた。始めエルドヴェンの町の教會の屋根がゆくてに眺められて、ごく近くのやうに思はれたのに、實際は五キロもあり、それに生憎このひどい驟雨をさけるところも見あたらず、いささか心ぼそくもなつたが、それでも十一時頃やつとたどりついた。このアリニエマンは千百二十九基のメンヒルからなり、十列にらんで長さ二千百五メートル、巾六十四メートル、その西端はエルドヴェンに通ずる大道によぎられてゐる。がゆつくり見てゐるわけにもゆかず、早々にしてもどきた道をひさかへした。幸にもすでに雨がやみ、風があつても背後にうけるのであまり苦にもならず、往きの時とはあべこべに心もかろく足も早く、果ては誰もきゝとがめるもののないのをいいことにしてなつかしい故國の民謡を聲高くうたひながらブ

ルアルネルにひさかへし、ついでカルナックに向つ

のレースの肩掛をかけて、男女とも多くはくりぬ

た。途中街道の近くにあるロン

いた木靴をはいてゐるが、さ

ドセクのドルメンとか、ケルカ

つきの子供達もすべてさうで

バのドルメンなどをみた。前者

あつた。オランダの風俗に似

は二個相並んで半身を小丘につ

たところがあつた。思はれ

ゝまれた恰好をなし、入口が草

た。

原に向つてあいてをり、後者は

しばらく歩いてオテル・エ・

全く地上に露出してゐる。この

レストウランとかいてゐる家

附近で、異人さんがめづらしい

を見出し、午食をたのんだと

のであらう、腕白ざかりの少年

ころ、おかみさん、こゝはレ

が十人あまりも集つてぼくをじ

ストウランでないと言つてす

ろじろ眺めてゐるので、手をあ

げなく断はられ、空き腹に少

げて招いたところ、恐いとみえ

々むつとしたけれども、仕方

てみんな逃げだしたが、寫真機

がないので更に一丁ばかり歩

をとりだしてみせると、笑ひな

いて他のレストウランにとび

がら再び集つて、おとなしく立

こんだ。店の次の部屋で丁度

ちならんでくれた。この附近の

午食を了へたらしい老主人と

風俗は他の地方とはいさゝか異

娘さんが、親切に大急ぎで

つてをり、女は黒色の裾の長い、袖のひらいた衣

仕度をしてくれた。パンも澤山にくれたし、ソー

服をまどひ、頭には白のレースを覆ひ、肩には黒

シンソンやオムレッツをむさぼるやうにたいらげて、



達 供 子 の ユ ニ ー タ ル プ

やつと元氣を恢復したのは午後一時半。ついでカルナックの町に入り、まづミルン博物館を訪れてこの地方の出土品を見、エハガキやパンフレットなどを買い、更にその東方數町ばかりへだてたモン・サン・ミッシェルのツムルスを見た。ツムルスとは人工的に土砂をもつて築いた塚であつて、長方形のものど圓形のものどがあり、このツムルスは長方形らしい。それより自動車を雇つてカルナックの東方十二キロのロクマリケに向つた。

ラ・ツリニテを経てまづケルベレスのドルメンを見、ついでマネ・ルドのドルメンに向つた。自動車が多ると帽子のリボンにドルメン案内人と白く染めぬいた男が畑の中に立ち、手をひろげて待ちかまへてゐた。案内を頼みもしないのに勝手に先に立つて導いてくれるのはいいが、この男眞午間にかゝはらず、したゝか酩酊をして危げな千鳥足の歩きぶりは甚だ心もとない。もともとフランス語がわからない上に、酔拂の説明ではなほさら仕末におへず、いいかげんにウイウイと合づちをうつてゐると、ますます得意氣にしゃべりちらす。

それでもマルジャンのテーブル、グラン・メンヒル、マネ・ルツアルのドルメンを案内してくれた。マネ・ルドのドルメンはツムルスの一部をなすものであつて、その西部に位し、通路を有し、支柱石の或ものには彫刻が施されてある。グラン・メンヒルは花崗岩の一つの石が三つに折れて地上に倒れてゐるが、全長約二十一メートルといふのであるから、もしこれが直立してゐたならば、さぞかし壯觀であつたらうと思はれる。メンヒルといふ語はブルターニ語の石を意味するメント、長いを意味するヒルからできてをり、定形のない直立の石で、たゞ一基のもあれば、數基集つてゐるのもある。或論者はたゞ一基立つてゐるメンヒルは、單に境界標のためにつつと後世に建てられたものであらうと言つてゐるが、しかし他の論者のいふやうに、たゞ一基のメンヒルは最も單純なものであるから、巨石紀念物の中の最も古いものではなからうか。さうしてまたその原始の意義も何等か宗教的性質のものではなからうか。それが後になつて境界標に用ひられたり、キリスト教徒から十字

やマドンナの像を附せられたり、或は獵夫の集合所に利用されたのであらう。またマネ・ルツアルのドルメンの一枚の覆石は極めて大きく、通路もまた非常に長い。ブルターニュ語でドルは平板、メンは石を意味するごとく、ドルメンは支柱となれる數個の直立せるメンヒルとその上を覆ふところの一個もしくは數個の非常に大きな平板石からなれるもので、一室もしくは數室、また通路を有してゐる。この地方のドルメンの多くは元來ツムルスとか、或は小石をもつて築きあげた人工的塚であるところのガルガルとかによつて覆はれてゐたのであるが、天候のため、或は百姓の耕作のために、今日みるやうに露出したのであるといはれるが、さつきのマネ・ルドのドルメンなどからみると、如何にもさうらしく思はれる。この地方の傳説によると、以前この地方に髪の毛の黒い矮人のケリオン族が住んでをり、身體は小さいけれども非常に力がつよく、今日でもなほ『ケリオンのやうにつよい』といふ言葉がしばしば用ひられるほどであるが、ドルメンはこのケリオンの住居であつたなどとい

ふが、ドルメンの眞の起原については學者によつて種々の異説があるやうである。一説によれば、ドルメンは洞穴に埋葬した舊石器時代の慣習の發展したものであつて、後になつて他の室とか通路が附加されるやうになつたのであるといふ。がこれに對して他の學者は、ドルメンの原型がエジプトの墳墓の一形式たるマスタバであると言ふ。即ちドルメンには二つの形式があつて、一は三個もしくはそれ以上の支柱石が直立して一つの場所を圍み、その上に大きな平板石が覆ふてゐるが、その石はしばしば前方に突出して恰も教會堂の玄關とか前庭の形をなしてゐるもの、他は直立した大きな石の並列からできてゐる通路によつて、室にいたることのできるものである。この二形式はマスタバの地上及び地下の一部分をそれぞれ模したものである。マスタバ墳墓の地上における部分の最もいちぢるしい特徴は、玄關と死者の彫像を安置してある室とであつて、この二室の通路は彫像を安置してゐる室の壁にある少孔であり、この特徴はフランス、カウカサス、インド其他における

ドルメンにしばしは再現されてゐる。これに反して地下の部分は多数の石によつてできてゐる室か、或は岩を切り開いてつくつた室からできてゐて、多数の石をつらねた通路によつて近づくのであるが、この形式はドルメンの他の形式と全く等しく、その上岩を切り開いて墳墓をつくることは、ドルメンをつくることと關聯してゐることがわかると言ふのである。がそれはとにかくロクマリケのこれらの遺跡を見了つて、さて酔拂ひの先生、チップが少いので甚だ不服らしく、握つた金をみつめたまゝ、何のあいさつもなしに、それでもいやさとは言はずに歸つて行つた。再びもとの自動車でカルナックに戻つた。

ついで村から北方九百六十メートルをへだてたメネクのアリニユマンをみた。これは千百六十九基のメンヒルを包含し、十一列をなして長さ千百六十七メートル、巾ほぼ百メートルもあるところの、すばらしく大きなもので、西南から東北に向つてをり、さうして個々の石も基點の方は長大である

が、東北方の末端に向つて次第に短小になつてゐる。西南の隅では牛が長閑に遊んでをり、近づくると犬がさかんに吠えたへた。このメネクのアリニユマンから東北方約三百二十メートルばかりのところにはケルマリオのアリニユマンと、更に僅かその東方にケルレスカンのアリニユマンとがあり、前者は九百八十二基のメンヒルが十列をなして、長さ千二百二十メートル、巾百一メートルに西南から東北に向つて走り、後者は五百七十九基のメンヒルが十三列に、長さ八百八十メートル、巾百三十九メートルに亘つて東西に走つてゐるのであつて、或學者の説では、以上三つのアリニユマンはもと一つの連續したものであつたらうと言はれる。たゞ残念なことには、後二者は時間の都合で割愛せざるを得なかつた。

一體アリニユマンとは一列もしくは數列をなして立ちならんだメンヒルの集團をいふのであつて、圈狀をなしたものはクロムレクである。このすばらしい巨石建造物は、しかしながら漸次につくられたものではなくして、一時につくられたも

のであり、従つて實際の墳墓ではない。それは祭

至の祭があり、ケルマリオにおいては春秋の彼岸

禮とか其他宗教的儀式を營む集合所のごとき、宗教的紀念物の遺跡である。たちならんだ石の間の通路は信者の通る神聖なる徑であり、クロムレクは御勤めをする祭司の神殿であつた。このメネク、ケルマリオ、及びケルレスカンの三つのアリニユマンの各々は、それぞれ特有の方向を有してをり、さうして各アリニユマンの末端にある大きなメンヒルは、夏至と春秋の彼岸とにおける日出と日没を指示するのであるといはれてゐる。従つてこれらのアリニユマンは或一定の目的のために建造されたものであり、その建造した人民は太陽崇拜の民であつたらうと言はれる。これ



メネクのリアニマシ

と關聯して興味あることは、メネクにおいては夏このアリニユマンに關してつぎのやうな傳説が

の祭、ケルレスカンにおいては冬至の祭があることである。がこれらの巨石建造物はいつ頃つくられたのであらうか。もちろんこれらのすべては同じ時代のものではない。メンヒル及びドルメンの起原はたしかに新石器時代であらうと思はれるが、一般に想像されるよりは新しいといはれる。といふのは、出土品の中には金屬器があるのみならず、ドルメンに施された彫刻が金屬器によつてなされた形跡があるからで、或論者のごときは、その時代を後期黃銅時代としてゐる。

ある。ローマ法王サン・コルネリは異教徒の兵士に追跡され、二頭の牡牛を伴つてにげた。荷物は牛に負はせ、疲れた時には自分も牛にのつた。或夕方彼はル・ムストアルといふ村のはづれにつきこゝに足をどごめようと思つたが、一人の少女がその母親をののしつてゐるのをきいて嫌になり、また歩みをつゞけ、間もなく他の小さな村のある山麓についた。ところが彼の目の前には海がひらけ、彼のすぐ背後には軍勢がまぢかに追つてゐるのを知つた。そこで彼は歩みをどごめ、法力をもつて彼を追つてきた軍勢を忽ち石に化せしめた。今日立ちならんだアリニマンの石は、その時の兵士の化石したものである。この大奇蹟の記念として、この近隣の住民が法王の歩みをどごめた場所に教會を建て、彼にさゝげた。かういふ理由でこの長い石の列がカルナツクの村の北にたちならび、また夜間『サン・コルネリの兵士』と呼ばれる小徑に幽霊の徘徊するのがみられるといはれる。またサンコルネリはその逃亡の際二頭の牛が彼につくしてくれたことを想起して、その返禮として家畜

の病氣をすべて治癒してくれろといふ信仰があり、諸國から家畜の病氣の治癒をサン・コルネリに祈願するためにやつてくる。即ち秋季朝早く日出とともに家畜を集め、嚴肅な行列をなして教會に向ひ、教會の北側の戸口において家畜の主人が跪坐して祈禱し、それからサン・コルネリの神泉にその家畜をつれて行つて水をかけて歸宅するのである。しかしながらケルトの神話によると、古代ブルターニュの神フリー・ガルダルの二頭の牡牛が、洪水を起したるアヴァンクと稱するおそるべき鱈を、強い鎖をもつて洪水からひきづりだしたと言はれるから、元來この地方に牡牛の信仰があつて、それが後にサン・コルネリの崇拜と結合して以上の傳説が生れたのではなからうか。なほこの外にこゝにきたる巡禮者は石の兵士の間を通りぬけるが、その際男は石を運び、女は土を運び、カルナック附近の高所にそれを落し、それがいつかつもつてサン・ミッシェルの塚を作つたのであるといふ傳説もある。

さてメネクからカルナックにひさかへすのは如

何にも遠う廻りのやうに思はれたので、地圖をたよりに左手の道を歩きだしたが、全く不案内の土地である上に、時々驟雨に襲はれ、思つたよりも時間をとつたが、それでもブルアルネルの驛についたのは五時半、丁度五時五十四分發の汽車で、六時十六分アウレイ驛にかへりついた。

四

昨日は一日中見物に駆けまはつた疲れと、殊に時々驟雨にうたれてじとじとした不快のために、ホテルに歸つてから早速風呂をたのんだところ、生憎機關の故障でできないと言つてゐたのに、しばらくして用意ができたといふのででかけたが、まるで水のやうなぬる湯であつた。一體西洋の風呂は長々と身體をのばされるのは悪くないが、身體を洗つた後ゆつくりつかつてゐられる日本の風呂も誠にいい。が昨夜の水風呂には閉口であつた。それでもタオルで全身をつよく摩擦すると、いくらかさつぱりした気分になり、そのまゝ寢臺

にもぐりこんでしまつた。今朝はすでに元氣恢復し、朝食後ぶらぶら散歩にでた。ホテルの前からやゝ下り坂になつてゐるごつごつした道をゆくと水邊にでた。空もくもり、風もつよいが、景色は水畫にでもしたいような古びた水郷の趣きであつた。

午前九時五分この町にも別をつげ、再び汚い汽車にゆられて昨日の道をひき返し、午後十二時八分ナントにてのりかへ、夕方七時ボルドウについた。驛前のホテルに投宿。

五

スペイン貨を用意してゐたけれども、これからまた田舎にでかけるのにフランス貨が少々不足のやうであつたので、まづ銀行にでかけた。途中街上に立つてゐる古びた中世紀の門などが自動車から見えた。さて時間表では十時二十二分バスチデ驛發ペリグウ行の汽車があるので、タキシードでかけたところ、この時間の汽車はこの驛でなくて、

昨夜自分のついたサン・ジャン驛であるといふのであはて、ひきかへし、やつと間に合ふことができた。ペリグウまで客車にはぼくひとりまで至極のんきにすごすことができた。こゝで汽車をのりかへねばならぬので、その間に驛の食堂に入つて午食をすまし、午後一時四十七分發車。同乗客の中には十二三才の少年をつれた五十恰好の英人らしい紳士と、十五六才の青年をつれた同じく五十年配の夫婦ものなどがあつた。汽車が峡谷の間を南下するにつれて石灰岩の露出があり、洞窟らしいのもあちこちに見えて、乗客の中には案内記をひろげてさゝやき合ふものもあつた。三時頃いよいよエジエーにつき、ホテル・クロマニヨンに投宿。部屋に荷物を置いて直ちに博物館を訪れた。

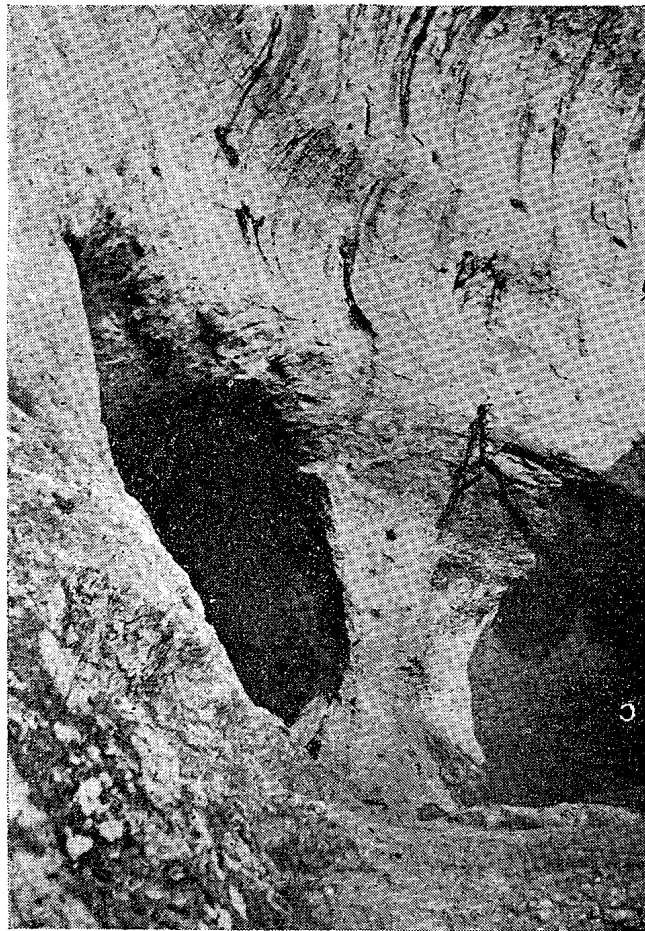
ホテルから南に街道をゆくと斷崖が覆ひかぶさるやうに人家の上に突出してをり、その中腹に石をたゝんで立つてゐるのが博物館で昔の城の廢墟を修築したものらしい。街道から左にそれて坂をのぼると入口がある。すでに十數人の訪問者があり、一人の老人が陳列品についてしきりに説明し

てゐた。この地方の出土品を始め、復原した原人の模型など陳列されてゐるが、特に目につくものは、ロウセル附近で發見された石灰岩の淺浮彫であつて、一個は高さ四十五センチメートルの女人像で、右手は水牛の角をもつて肩のところにあげ、左手は腹部に垂してゐるもの、一個は四十六センチメートルの男子像で、頭と腕と足部とは缺けてゐるが、胴體から脚部にかけての恰好が實によく、その姿勢から多分弓をひいてゐるのか、槍をなげてゐるところだらうと言はれる。いづれもアウリナシアン期の作であるから、果して弓矢があつたか疑はしいけれども、とにかく何かの動作をあらはしてゐるものらしい。こゝで畫ハガキとパンフレットとを購ひ、ついでフォン・ド・ゴームに向つた。

博物館の下の街道を一寸南に行つてから左に折れてブーヌ河谷に入り、東方十町ばかり歩いて後、更に右手の山裾の小徑を一丁ばかりのぼると石灰岩の露出があり、そこに洞窟の入口が大きな眼窠のやうに開いてゐる。づつとちくれてのぼつてき

てゐる案内人の老婆を待ちながら、入口の前に立つて谷間をみはるかすと、二三間のところに細長のびた若木の山櫻でもあらうか、白い花を點々と開いてゐるのが、いちらしく見えた。やがて老婆の案内で洞窟に入

つた。内部は電燈がともされる。全長百二十メートル、それに三つばかりの支洞がある。老婆が先きに立つて、畫のあるところでは、これが野牛であるとか、こゝが頭であるとか、足であるとか、尾であるとか、いろいろ説明をしてくれる。が實のところそんな説明なんか、わかつてもわからなくても、どうでもいいのである。この狭い洞窟の壁につきつぎに現はれてくるすばらしい藝術は、全く驚嘆そのものであつ



窟 洞 ム - ゴ・ド・ン オフ

て、それが數萬年前の舊石器時代の製作であることを思ふと、自ら敬虔の念さへ湧くのであつた。單なる彫線畫もあれば、また黒赤、褐色などを用ひた彩色畫もあり、描かれてゐる動物は野牛、馴鹿、馬、マンモス、犀、狼などで、殊に興味あるのは、所謂大畫廊と稱せらるるところの群獸畫であつて、マンモスや野牛などの行進を描いたもの、しかも或る部分は、一度描いた上に更に二度描いてゐる。個々の畫において、草をはんでゐる二頭の馴鹿のごとき、一頭は立つて頭をか、一頭は地上にかゞみ、お互に向き合つてゐるなどやかな姿勢が、いかにも自然である。また有毛犀の畫のごとき有毛犀そのものが珍しい上に、

る二頭の馴鹿のごとき、一頭は立つて頭をか、一頭は地上にかゞみ、お互に向き合つてゐるなどやかな姿勢が、いかにも自然である。また有毛犀の畫のごとき有毛犀そのものが珍しい上に、

赤い太い線の簡単な描寫法が面白く、また狼の畫のごとき、赤味のつよい代赭の地の上に、黒の太い強い線で側面の上半身が描かれてゐるが、その筆致といひ、姿勢といひ、實に狼の精悍な面影が遺憾なく表現されてゐる。が見てゆくうちに甚だけしからぬと思つたのは、こゝを訪れた人々が己の姓名を畫の近くに彫りつけてゐることで、彫線畫のごときはたゞでさへ判明しにくいものがあるのに、これによつてますます亂される恐れがある。くだらない人間——誠にかういふことをするのはくだらない人間に限られてゐる——の署名が、この洞窟でたとひ數萬年後の世にのこつたとして、それがなんの價値をもつといふのだ！ 名をのこしたいのなら、仕事の上でのこせ！ と心中大いに憤慨を感じたのであるが、しかし案内の婆さんはもちろんぼくの憤慨には頓着なく、『これはマンモスの牙で……』などと説明してゆくのであつた。こゝを出て更にもこの本街道を十町ばかり東にゆき、さうして街道から約百メートルばかり右に入つたところにコンパレルの洞窟がある。途中梨

の花が白く咲きみだれ、小鳥がのどかに囀つて、いかにも平和な春景色であつた。佝僂の老人と七八才位にしが見えない可憐な少年とが畑の傍で待つてゐたかのやうに迎へてくれた。さうしてガスランプをぼくに渡し、少年が蠟燭を灯して案内してくれた。曲りくねつた全長二町もあらうかと思はれる狭い洞窟で、所々水がたまつて歩行を妨げる。それを少年が『アタンション！』と注意してくれるのはいいが、自ら水の上に敷いた板の端をふまへて、しぶきのとびあがるのを見て喜ぶ仕末である。第一の畫は入口から一町あまりも奥まつたところに始めてあらはれる。フォン・ド・ゴームと異つて、こゝの畫は専ら彫線畫ばかりであつて、色といへばたゞ黒色をもつて彫線を強めてゐるにすぎない。描かれた動物では馴鹿、馬、マンモス、野牛、犀、山羊、カモシカ、或は穴熊などがあり、その中マンモスの或畫のごときは誠にいいものだ。さうしてこれらの畫を説明するところの少年は蠟燭の灯で顔半面を白く浮せて、多分親爺から教つたであらう文句をたどりたどり暗誦的にのべ

るのは、たまらないほど可愛いものであつた。

こゝを出てから村にひさかへし、エハガキ店でエハガキや石器二三個購ひ、ホテルに歸つたのは七時であつた。夕食後村はづれの方に散歩した。ホテルの前から道を右折してゆくとヴェゼル河が涇々と流れ、その上に架した石橋に立つて左方の村を眺めると、白い河の水をへだててクロマニヨン洞窟から博物館附近に亘る斷崖が黒く聳えてゐる。夕闇の中を牛を追うて歸る農夫が異國人のぼくに向つて、『今晚は』と挨拶をかけてゆく。全く静寂な、太古そのまゝの感じのする村である。

六

十七日。今日も晴れたいい天氣である。朝九時ホテルを出てヴェゼル河谷の洞窟見學にでかけた。昨夜散歩した石橋を渡つて右に析れてゆくとロック・デュ・タイヤックがある。道の上に覆ひかぶさつた高い斷崖で、その中腹の處々に凹んだ岩屋が見える。その下を通りすぎてから左方の小さな谷

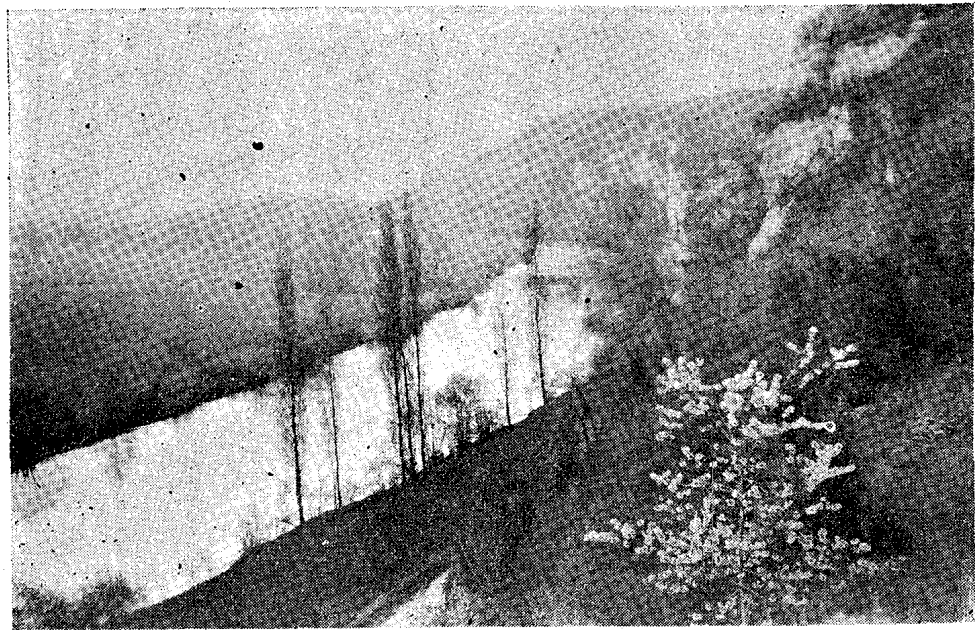
に入るとゴルジ・ダンフェルがある。山裾に開けた大きな岩屋であつて、その入口から下の草原にかけて發掘されたであらう土石がうづ高く吐きだされてゐる。もとの街道にひさかへし、しばらくすゝむとル・グラン・ロックがある。高い斷崖の中腹に設けた幾段もの棧道をのぼりゆくと入口に達するので、内部は奇體な形狀の結晶石を有する非常に長い、さうして美事な鐘乳洞である。この洞窟の入口に建てられた小屋の前もしくは棧道から見渡す眺望は、これまたすばらしく、すぐ目の下を流れるヴェゼル河が幾うねりして遙かエジエーの村の方に流れてゆき、河畔にはポプラが高く立ち、綠野には牛が悠々と遊び、手前の山麓には何か白い花が笑みこぼれてゐる。

こゝを降りてゆくと、すぐロウゼリー・バスである。街道から少し左によつた山裾で、岩屋の前に人家があり、若い女が二人ばかり仕事をしてゐたが、ぼくの顔を見て異人さんを怪しむやうな表情をしたが、すぐその中の一人が出てきて案内してくれた。こゝはマグダレアン期の特色である骨

角器を豊富に出したところであつて、現在その岩屋の包含層の断面を金網をはつてそのまゝに示してゐるが、これによつてアウリ

ナシアンとか、ソルトレアンとか、マグダレアンとかの層位を實際にみる事ができて甚だ面白い。岩屋を一巡してのち博物館に案内され、こゝでエハガキと鹿の頭を刻んだ骨製の模造品を一個買った。こゝから二丁ばかりゆくとロウゼリー・オウトがある。番人はなく木棚に錠がかかつてはいれないので、そのまま街道をすゝんでゆくと、野良仕事にでかけてゐたらしい男がはたふたやつてきて開けてくれた。他にも數人見學者があつた。ここもまた包含層の断面に金網をはつてみせてゐる。ついでこゝから更に二キロ隔れるカルプ・デムにでか

けた。いままで河に沿うてゐた街道が河と別れて鐵道線路に沿うて左折し、更に線路を横切つて山坂をしばらくのぼりゆくと、山腹に農家が數軒立つてゐる。その中の一軒から若いお



エジエの一の遠望

かみさんが出てきて案内してくれました。入口は人家から畑道をすこし下つたところにある。こゝは晝が一つもない單なる鐘乳洞で、鐘乳洞としても内部の美しさは前のグラ・ロックに劣り、それにどうしたとか、二度ばかりも電燈が消えて、まつくらな洞中で案内の女と二人きりで——と言へば甚だおもしろさうだが——たゞづまざるを得なかつたのは、その實やつかいなこゝであつた。こゝを出てから約四キロの道を空腹をかゝへてホテルに歸る

のは、これまた大儀なことであつた。

午食をすまして食堂からでてくると、三十年配のがつしりしたホテルの主人は、

『かういふ人を知つてゐますか』

と言つて、一葉の名刺を差出した。みると知人移川子之藏氏の名刺ではないか。

『この人はぼくの懇意な人ですよ』

といふと、主人は非常に喜んで、移川氏が先年十日ばかりもこゝに滞在し、洞窟はのこらず主人が案内して廻つたことをのべ、さうしてぼくに移川氏宛の手紙を托したいといふ。移川氏は現在臺北大學に居られるので、ぼくが日本に歸つてもすぐには直接會へないであらうが、とにかく承知の旨を答へた。すると今日の午後は主人自ら自動車で他の方面を案内しようと言つてくれた。これはまことに有難い。ひとりで歩いたのでは時間の點で甚だ不經濟であり、殊にこれから訪れようとするところは少し遠方であるから、主人に案内してもらへば、これにこしたことはない。で早速自動車

の用意をして、まづ六キロ半もあるキャブ・プランに向つた。昨日コンバレルへ行つた街道をざんざん走つてゆくと山路にさしかゝつた。坂の途中で車を停め、主人は街道から左手の中腹に通じた小徑をのぼつて行つて、一軒の農家から老婆をつれてきた。さうして車をそこに置いたまゝ街道から右手雑木林を二三十間も下りてゆくと、少し開けたところに出た。その裾に岩屋があり、前方は小屋をつくつてかくまつてゐる。老婆は戸の錠をはずして入れてくれた。こゝには馬の浮彫がある。露出した岩根にあたるところに六頭の馬が高く浮出るやうに彫られてゐて、その中二頭が最も傑出してゐるが、特にその一頭は、下半身が完全でないけれども、頭から首、脊、及び腰のあたりの上半身は、全く眞に迫つた美事な出來榮えで、後述するところのスペインのアルタミラにおける繪畫とともに、舊石器時代藝術の最も驚嘆すべき傑作といはれてゐる。なほこゝの小屋の一隅には人骨を硝子箱に入れて据ゑてあつた。

こゝをひきあげて一旦エジエーの村にひきかへ

し、更に南へ山坂をすゝんでラ・ムートに向つた。しばらくゆくと臺地になつた畑にでた。こゝで自動車をして、徒歩で更に二三町ゆくと、ぼくの郷里の雑木林に澤山ある青剛樹イヌメガシ（ぼくの地方ではウマベといふ）に似た木の生ひ茂つた坂路にでた。この木は何かどの間に、シヌベーヤとの答であつた。ホテルの主人はやはり農家から案内の男をつれてきた。目指す鐘乳洞は、シヌベーヤの茂つた坂路の中腹にある。ホテルの主人を外にのこして案内の男と二人で入つたが、約二丁あまりの長い洞窟で、書も約一丁ばかりすゝんで始めてあらはれる。主として野牛、馬、馴鹿、及びマンモスなどの彫線畫で、中には赤や黒の彩色を施されたものもあるが、その手法はコンパレルの畫などに比べて極めて未熟で、マグダレアン初期に屬すると言はれてゐる。がたゞこの洞窟が一八九五年に發見されて以來、これも後述するやうに、長い間忘れられてゐたスペインのアルタミラの洞窟畫が再び注意されるに至つたので、この點において特にこの洞窟に意義がある。

さてエジエーの村に歸つてから、ホテルの主人と別れ、ひとり村の背後、人家の上に突立してゐるグロット・デゼジエにでかけた。人家を通りぬけて畑道をよぎり、突出した岩腹をよちのぼると、まるで城壁のやうに岩壁が立ちならび、その下に處々岩屋がある。老婦と若い女どがしきりに土をおこして石器を採集してゐた。多分旅客に賣りつけるためであらう。ぼくも今日一日で若干採集しホテルの主人からも數個もらつた。しばらく岩の上から平和な村を俯瞰し、ホテルに歸つたのは四時半頃であつた。

七

十八日朝ホテルを出るとき、かねて東京の友人から送つてもらつて讀み了つた濱田耕作博士の著考古遊記を紀念としてホテルの主人に與へた。本書にはこの地の訪問記があり、君のホテルの名も出てゐるよと説明すると、日本語のよめないのは甚だ残念だと言ふ。午前六時五十分エジエー發の

汽車にのり、八時ペリグウでのりかへ、午後一時三十四分ポルドウ發の汽車でいよいよスペインに向ふ。自ら英人と稱する五十恰好のあまり感じのよくない男が、ぼくと向ひ合つてゐたが、向ふから話しかけてきた。丁度イギリス議會では勞働内閣の藏相スノーデンが大膽なる増稅計畫をたて、大論議を湧してゐた際であつたから、『君はこの問題をどう思ふ』とさう出すと、一言も答へずに不快さうに黙してしまつた。前年スエーデン旅行の際同乗客の、白人としてはむしろ小柄の男が、ぼくに向つて、『露支の問題をどう思ふかね』と不意に話しかけてきた。丁度ロシヤと支那とが北滿で衝突して、一時シベリヤ便の不通になつた時である。その際はあまり話したくもなかつたので、至つて無愛想に『ぼくは支那人ではない。君はロシヤ人か』とやり返したところ、『いや、ぼくはイギリス人だ』と、如何にも辯解でもするかのような態度で苦笑しながらそれつきり黙つてしまつたことがある。一體イギリス人は自らも認めてゐるやうに、甚だ無愛想で、車中などで自ら話しかけるなどは

至つてすくなく、この點同じ英語國民でも陽氣で氣輕なアメリカ人とは著しく異なるので、従つて自らイギリス人だと稱しながら馴々しく話しかけてくるなどは少々怪しく思はれた。さて件の男、ベイヨンスではたゞしく下車したのはいいが、も一度客車にひきかへし、ぼくに向つて『君もこゝで降りるのではないのか』とさう。そんなことは何も話したことはない。『ぼくはスペイン行きだよ』と答へると、なんだか案に相違したといつた表情をして出て行つた。

午後六時十五分國境のイルン着、こゝから電車でサン・セバスチアンにゆき、ホテル・ヒスパノ・アメリカノに投宿。スペインではフランスなどと異つてサンマー・タイムではなく、その上夕食の時間が八時以後になつてゐるので、甚だやりきれなかつた。夜市中を散歩すると、若い男女がぞろぞろ市街を歩いてゐる。彼等のかむつてゐるヴェールはフランス風のはちがつて、鳥打帽式に上部がひろがつてゐる。海岸にでると海からふく風がよく、正面に當つて燈臺の灯が明滅し、波の碎け

るのが闇の中に白く光つてみえた。

八

十九日。朝食後市街から海岸を散歩した。避暑地として知られてゐるところだけあつて、市街建築すべて近代風で、スペインの特風はあまりみられない。午前十時十二分の汽車でサンタンデルに向つた。途中ビルバオで停車の時間を利用してプラットホームの食堂で午食をなし、午後六時四分サンタンデル着、うるさい宿引の誘惑をしりぞけて驛前のホテル・コンチネンタルに投宿。

九

二十日。サンタンデルを午前九時五十分の汽車にのり、約五十分ばかり南に走つて、トレラヴェガに達した。乗合自動車がすぐにあることと思つてゐたが、午後五時でなければ出ないといふので、やむを得ずタキシードを雇ひ、アルタミラに向ふ。

途中悠々と驢馬に跨つたり、荷物を負はせたりしてゐる人々にしばしば出合つたが、いかにもスペインの田舎らしい變つた風景だ。十五分ばかりで目的地についた。

アルタミラはサンチラナ村の西南約二十町ばかりの丘にある。自動車を下りると、すでに遠くから認めてゐたらしく、番人とその子供とが戸外に立つて迎へてくれ、すぐに博物館へ案内してくれた。こゝにはオーバー・マイエルの一九二四年から二五年にかけての發掘品を多く陳列してある。こゝでも案内人は移川氏と濱田耕作博士との名刺をみせた。なほ訪問者の名簿には幸田成友博士、間崎万里氏其他二三の日本人の署名があつた。洞窟の入口は博物館の手前の左方一寸窪んだところであり、入口の眞上にあたる草原にその發見者たるサウツオラの記念碑が立つてゐる。この洞窟は永い間すでに埋没してゐたのであつたが、この附近の或る獵夫の犬が獲物を追つかけてゆく中に岩の間に陥つたので、それを助けるために石をとり出し、それで偶然洞窟の入口が發見された。それが一八

六八年のことで、一八七五年に至つて前記サウツ

た時代、即ち舊石器時代の最後の氷河期でなければならぬといふ事實を認め

オラによつて始めて探究され

ることができなかつたのである

た。その中一八七九年父のサウ

る。まもなくピエラ教授がサ

ツオラにともなはれてこの洞窟

ウツオラの説に賛成したけれ

を訪れた當時七才の娘が片手に

ごも、この兩人ともその説の

蠟燭をさゝげてすゝんで行つた

正しいことを一般に認められ

ところ、不意に『牛!』と金切聲

ることなくして歿した。それ

で叫んで父親を驚かした。みれ

が前述のごとく、フランスの

ば天井には、野牛の畫が澤山描

エジエー附近において多くの

かれてゐる。これがこの洞窟畫

舊石器時代の洞窟並びにその

発見の端緒であつて、サウツオ

繪畫が発見されるに及んで、

ラは一八八〇年その発見報告書

彼等の説の正しさが是認せら

を公にしたが、世人からはむし

れ、それとともにこの洞窟繪

ろ疑惑と嘲笑とを酬ひられ、ス

畫に對する學者の注意が新に

ペイン及びフランスの多くの學

喚起せられるに至つたので、

者は、この洞窟畫をもつて近世

サウツオラの光輝ある発見を

の牧人達の製作となし、そこに

永くつたへるための前記紀念

描かれてゐる野牛のごときはす

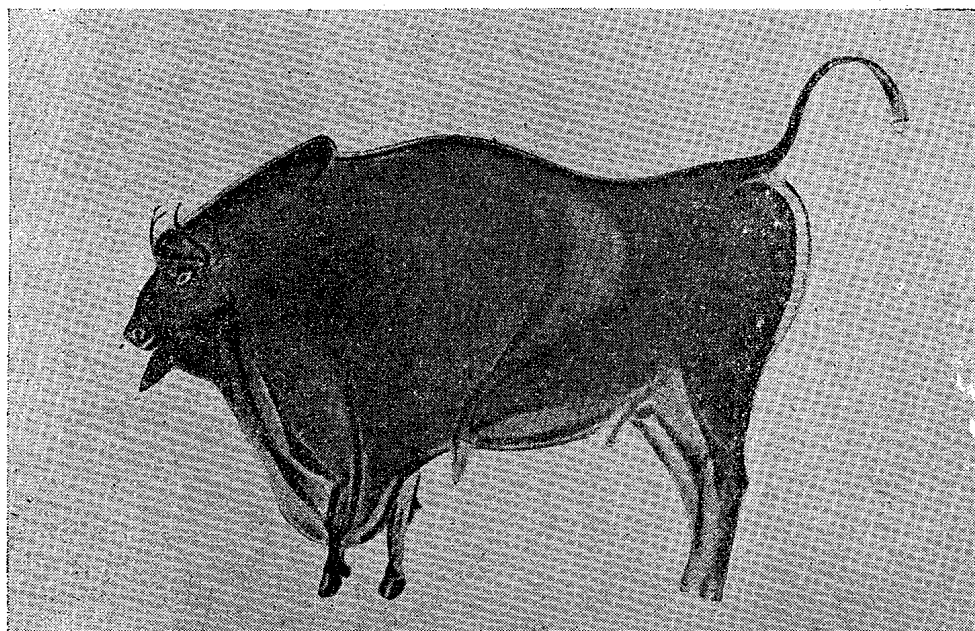
碑は、一九二一年に建てられたのである。

でに遠く昔にこの地方から絶滅した動物であり、

洞窟は全長二百七十メートルで、所謂『先史藝

従つてそれが描かれたのは當然それが生棲してゐ

部一の畫窟洞ラミタルア



部一の畫窟洞ラミタルア

術のシタスチン・チャペル』と稱せられる天井畫のあるところは、入口のつぎの最初の廣間から左方の奥にあたる部屋で、長さ十八メートル、巾八・九メートルの一區劃をなし、天井は至つて低く、高いところで二メートルにすぎない。が電燈の光で照りだされたこの天井畫のすばらしさは、これこそ全く絶賞に價するものである。色彩は主として黒、黄、赤、褐色などであるが、エジエーのフォン・ド・ゴームのよりも更になまなましいほど鮮かで、他の條件を知らず、たゞ一見した印象だけでは、舊石器時代の作とは思はれないほどであり、多くの學者が最初これを疑つたのも無理のないことと思ふ。この部屋の床の中央部はいくらか高くなつてをり、そこへ案内人がゾックを敷いてくれたので、その上に仰向けになつて見ると一層細部がよくわかる。この天井畫は二十數頭の野牛、鹿、野猪などの彩色畫で、野牛が大多數であり、蹲れるもの、立てるもの、駈けるもの、咆哮するものなどのあらゆる運動の姿態を描いてをり、さうして圓味ある岩の隆起部を利用して動物の脊部を巧

みにあらはしてゐるなど興味津津たるものがある。その形の自由なること、その筆致の奔放なることは實に驚くばかりで、この點だけからみると或る日本畫に類するとも言へるが、しかしあくまでリアリズムの精神に徹してゐる。この天井の彩色畫以外に、洞窟内には種々の彫線畫もあり、その中には假面をかむれる人體とも思へる畫などがある。フランスのエジエー及びこのアルタミラの兩洞窟畫は、いづれもマグダレアン期の製作で、いろいろの點において兩者は非常に類似し、さうして舊石器時代人の生活した環境とか、生活方法とか、或は文化狀態などを推知するにまさき資料であるが、一體かくのごとき繪畫が何んの目的で描かれたのであらうか。或論者は魔術的動機によることなし、或論者は純藝術的動機によることなし、大體この二説が最も有力らしい。がそれはとにかく、これらの洞窟畫をみてゐると、悠久の昔から今日までにいたる人類の歴史に對するかぎりなき興味が新に湧くのであつた。この洞窟内で石器數個及び動物の齒、貝殻などを得、ついで博物館の右手

をや、下つたところにある新洞窟に案内してもらつた。こゝは單なる鐘乳洞であつて畫はない。再び博物館に入つて、エハガキやパンフレットを買つてゐると、日曜のために町に出てゐたらしい番人の肥つたおかみさんが、にこにここと歸つてきた。

歸途はトレラヴェガまで歩くつもりでゐたところ、朝からくもつてゐた空が終にふりだしてきたので、すぐ目の下にみえるサンチラナに下り、タキシーを雇つ



俗 風 の ニ イ ペ ス

だが、もちろん田舎のスペイン語なんかわかる筈はないのだけれども、それでも勘がよければ案外意思が通ずるもので、ぼくの買つてもつてゐたエハガキの値段をきいて、『それア少し高い』とか、

親爺のはいてゐる木靴を指して、『足がくつついてゐるね』といふと、『道が悪いので泥よけだ』などと、日本語とスペイン語との會話をしばらくした。外國の旅行で言葉のために不便を感じるのは毎々のことであるが、それかといつてそれがため

た。運轉手が用意する間ガラチーヂに入つてゐると、六十才位の、胡摩鹽の、いかにも樸訥らしい親爺が、數人の子供とともに、異人さんが珍しいとみえてやつてきた。さうしていろいろ話しかけるの

にくよくよするのは愚の骨頂で、失敗や滑稽を演ずるのを恐れるのは、旅の場合ばかりでなく、人生の逃避者といふべきだ。ことにこの親爺など田舎者の單純と正直とを示して甚だ面白い。一體ヨ

ローッパでも都會では時々瞞されて腹を立てるところがあるが、田舎を旅行してかつてさういふ経験は一度もなかつた。人情はどこへ行つても同じとみえる。さて親爺の木靴であるが、それはオランダとか西部フランスで用ひてゐるものと似てゐるが、たゞその底に前方二本、後方一本の圓壘形の足がついてゐるので、この點日本の足駄と同じ效用である。なほサンタンデルでは女が頭上に籠をのせて歩いてゐるのを見た。スペインにも頭上に物をのせて運ぶ風習のあるのを知つて面白く感じ

た。

さつきの親爺達に見送られてタキシードでトレラヴェガにかへり、驛前で午食をすまし、午後二時四十分の汽車でサンタンデルにもどつたのは四時前であつた。夕方雨中を散歩して港や市街を見物した。まづこれでかねて自分の欲してゐた石器時代の遺跡探訪が了へたわけで、數萬年前の舊石器時代の印象派の畫を見た目でいよいよこれからマドリッドに行き、近代印象派の先驅者たるグレコの畫に接するのが樂しみでならなかつた。

松 本 芳 夫